

ヘルスリテラシーの視点を取り入れた小学生向け認知症啓発教材と評価尺度の開発

Development of Dementia Awareness Educational Materials and Evaluation Scale for Elementary School Students with a Health Literacy Perspective

榎田 聖子^{*1}, 三上 滉史^{*1}, 高田 賀章^{*1}, 真嶋 由貴恵^{*1}

Seiko MASUDA^{*1}, Koji MIKAMI^{*1}, Yoshiaki TAKADA^{*1}, Yukie MAJIMA^{*1}

^{*1}大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科

^{*1}Graduate School of Humanities and Sustainable System Sciences, Osaka Prefecture University
Email: s_masuda@kis.osakafu-u.ac.jp

あらまし：わが国では認知症高齢者の急激な増加に伴い、効率的・効果的な認知症啓発教材の開発が喫緊の課題である。我々はこれまで、小学生を対象として知識の差異を考慮し実践的に学ぶロボット教材を開発してきたが、小学生が認知症の症状と行動を結び付けて理解することは難しかった。そこで、これまで開発した小学生向け認知症啓発教材を見直すとともにヘルスリテラシーの視点を加え、その評価尺度を開発したので報告する。

キーワード：ヘルスリテラシー，小学生，認知症啓発教材，評価尺度

1. はじめに

WHOの報告⁽¹⁾によると、認知症患者は2050年には世界で1億5千万人、わが国では1千万人に上るとされ、認知症への啓発を図るための認知症サポーター養成講座(以下、講座とする)が多く地域や学校で開催されている。講座では、認知症高齢者を偏見なく正しく理解し、適切に対応することを学ぶ。しかし、講座終了後の参加者で認知症高齢者に対して、「少しの声かけや手助けで実行できることが多い」や「出現している症状には意味がある」への理解が70%にとどまっている⁽²⁾。

筆者らはこれまで、小学生が認知症高齢者を偏見なく正しく理解し対応できる力を育成するロボット教材を開発したが、認知症高齢者と家族の困りごとのイメージ化や認知症による症状の意味を理解することは難しかった⁽³⁾。そこで、認知症啓発教育の中に、小学生が得た情報から状況判断して行動ができるようヘルスリテラシー(以下、HLとする)の視点を取り入れる必要があると考えた。本稿では、小学生が講座をとおしてHLを養うことができるよう、我々が開発したロボット教材を見直すとともに、ロボット教材の効果を測定する評価尺度の開発を行ったので報告する。

2. 先行研究

2.1 HL教育

Nutbeamは、HLについて、知識を理解する「機能的HL」、個人のスキルを高める「相互作用的HL」、個人とコミュニティの活動ができるスキルを高める「批判的HL」の3つがあるとしている⁽⁴⁾。学校教育や生涯教育等で長期的にHLを高めることは、個人の健康だけでなく、コミュニティ全体の健康を高める⁽⁵⁾。また、HLの高い人は特定の健康問題だけで

なく、新たに生じた健康課題にも応用できると考えられている⁽⁶⁾。小学生では、健康教育と防災教育をつなぐHL教育デザインによって、災害時の健康問題に着目した健康教育をとおしてHLの向上が報告されている⁽⁷⁾。本研究では、小学生が認知症高齢者のできることに着目し、「少しの声かけや手助け」、「出現している症状の意味」を理解した対応ができるためにHLは必要なスキルと考える。

2.2 小学生向け認知症啓発教材

小学生を対象とした講座では、認知症の基礎知識および認知症高齢者への対応方法をスライドや紙芝居、寸劇やグループワークを行っていることが多い。これらの教材は、講座を開催する講師役のキャラバン・メイトが手探りで作成している。講座で学んだことを確認するために、認知症高齢者への声かけや対応方法を実際に体験した結果をフィードバックすることが必要である。しかし、そのようなプログラム殆どない。そのため、筆者らは学んだことをフィードバックするための教材が必要である。

筆者らが開発したロボット教材では、小学生が認知症への学びを効果的に共有することができた。ロボットは、擬人化や身体性によって学習の場や視線の共有、学習者の注意をコントロールし集中を促すこと、情動の効果、向社会的行動などの学習効果が期待できる⁽⁸⁾。ロボットの利点を活用することで、小学生の柔軟な発想を養い、認知症高齢者の尊厳を保つ接し方を学ぶ経験によってHLを高める教材となると考えた。

3. 教育プログラム

3.1 本プログラムにおけるHLへの対応

当日の授業計画を表1に示す。学習目標は、「相手の気持ちを知らうとする」、「相手に寄り添う声かけ

ができる」とした。本プログラムでは、ロボットによる情動効果や向社会的行動を高めるために新たにロボットによる寸劇を追加した。本プログラムにおける HL への対応は、展開部分①で寸劇や講義、クイズによって機能的 HL に対応させて認知症に関する基礎的な知識を養う。次に、展開②でグループワークやまとめをと相互作用の HL と批判的 HL に対応させ、グループメンバーや地域関係者と相談して認知症の人に適切な対応を考えるスキルを養うこととした。

表 1. 本プログラムにおける HL への対応

流れ	内容	教材	HLへの対応
導入	あいさつ	なし	
展開①	コミュニケーションロボットによる寸劇 (自分の家がわからないロボいさん編) (昔と今が混在するペッパーおばあちゃん編)	Pepper RoBoHoN	機能的HL
	年をとること・高齢者の特徴	スライド Pepper	
	認知症について(症状の理解、対応方法の理解)		
	対応のポイント	スライド	
	休憩		
展開②	認知症の対応を考える	ワークシート	相互作用的HL
	発表、ピア評価により表彰	Pepper ワークシート	
まとめ	地域の取り組み・まとめ	スライド	批判的HL
	地域の民生委員・西堺警察からオレンジリング授与	オレンジリング	

3.2 評価尺度

開発したロボット教材のどの要素が認知症啓発教育に効果があるかを明らかにするため、評価尺度を考案した。認知症高齢者の支援に関する評価尺度はないため、認知症サポーター小学生養成講座副読本⁹⁾を参考に項目を作成した。表 2 は、ロボット教材に対する意見と講座前後の質問項目である。ロボット教材の楽しさやわかりやすさ、認知症に関する知識の習得(機能的 HL)、認知症の人の気持ちを理解して適切に対応できる力(相互作用の HL)、地域で認知症の人を支えるまちづくり(批判的 HL)について確認する内容とした。HL に関する項目は、講座前後で回答を求めることとした。

今年の 3 月に、開発した教材と評価尺度を用いて小学生に対する認知症啓発教育を行う予定であった。しかし、新型コロナ感染防止対策のため中止となった。次回の開催は、今年度中に総合的な学習の時間 2 時間を充てて実施する予定である。

表 2 ロボット教材に対する意見と講座前後の質問項目

	しつもん	かいとう(勉強した後)
1	ペッパーとの勉強は楽しかったですか	とてもたのしかった・たのしかった・すこしたのしかった・あまりたのしくなかった
2	ロボホンとの勉強は楽しかったですか	とてもたのしかった・たのしかった・すこしたのしかった・あまりたのしくなかった
3	ペッパーの話はわかりやすかったですか	よくわかった・まあまあわかった・あまりわからなかった・まったくわからなかった
4	ロボホンの話はわかりやすかったですか	とてもたのしかった・たのしかった・すこしたのしかった・あまりたのしくなかった
5	今日のスライドはわかりやすかったですか	とてもたのしかった・たのしかった・すこしたのしかった・あまりたのしくなかった
6	クリックカーを使うとわかりやすかったですか	よくわかった・まあまあわかった・あまりわからなかった
機能的HL	認知症(にんちしょう)はだれでもなるびょうき	はい・いいえ・わからない
	昔のことはおぼえている	はい・いいえ・わからない
	うれしい、かなしい気持ちはかわらない	はい・いいえ・わからない
	からだを動かすことはできる	はい・いいえ・わからない
	なれた人やものがあると家でくらせる	はい・いいえ・わからない
	何回もおなじことをきいたりする	はい・いいえ・わからない
批判的HL・相互作用のHL	知っている人やものがわからなくなる	はい・いいえ・わからない
	こまっているのは、にんちしょうの人とその家族と思う	はい・いいえ・わからない
	にんちしょうでこまっている人を見かけたら大人につたえることができる	はい・いいえ・わからない
	にんちしょうでこまっている人がいたら助けたい	はい・いいえ・わからない
	こまったときに助けてくれる人がいるまちはいくらしやすい	はい・いいえ・わからない
	にんちしょうの人にどう声かけをすればよいかわっている	はい・いいえ・わからない
相互作用のHL	まちでにんちしょうの人をみまもるほうほうを知っている	はい・いいえ・わからない
	もつのにんちしょうのことを知りたい	はい・いいえ・わからない
	いま勉強したことは、これから役に立つと思う	はい・いいえ・わからない

参考文献

- WHO : “Global action plan on the public health response to dementia 2017 – 2025” ,<https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/> (参照 2020.6.6)
- 宮野公恵, 成松玉委, 藤井博英: “認知症サポーター事業に関わる現状と課題”, 東京情報大学研究論集 Vol. 21 No. 2 pp. 67-75 (2018)
- 村嶋琴佳, 梶田聖子, 真嶋由貴恵, 中村裕美子: ロボット教材を活用した小学生向け認知症啓発プログラムの実践と評価, JSiSE2019 第 44 回全国大会講演論文集, pp.89-90 (2019)
- Nutbeam D: “The evolving concept of Health Literacy”, SOC Sci Med. 2008;67(12), pp.2072-2078 (2008)
- 村田淳子, 荒木田美香子, 白井文恵: “Health Literacy の概念分析ー保健センターで展開される健康教育の場においてー”, 日本看護化学会, Vol.26, No.4, pp.84-92 (2006)
- 石川ひろの: “ヘルスコミュニケーションとヘルスリテラシー”, 保健医療社会学論集, Vol.22 , No.2, pp.16-21 (2011)
- 江藤真美子, 山田政寛: “健康教育と防災教育をつなぐヘルスリテラシー教育デザインとその効果”, 日本教育工学会論文集, pp.461-475 (2018)
- 柏原昭博, “エンゲージメントを引き出す学習支援ロボット”, コンピュータ&エデュケーション, Vol.46, No.1, pp.30-37 (2019)
- 全国キャラバン・メイト連絡協議会, “認知症サポーター小学生養成講座副読本” (2014)